

「小さな親切」運動 栃木支部

第47回作文・標語コンクール入賞作品

**「小さな親切」運動本部**

できる親切はみんなでしよう それが社会の習慣となるように



令和3年10月5日(火)

## 「小さな親切」運動とは

昭和38年3月、東京大学の卒業式において、当時の茅誠司学長が、告辞の中で卒業生に贈った言葉が、下記の言葉です。

「小さな親切」を勇気をもってやっていただきたい。  
そしてそれがやがては、日本の社会の隅々<sup>すみずみ</sup>まで埋めつくすであろう、親切  
という雪崩<sup>なだ</sup>れの芽としていただきたい。

これがきっかけとなって、この年の6月13日、茅学長をはじめ阿部真之介氏（当時、NHK会長。以下同じ）、上田常隆氏（毎日新聞社長）、栗田確也氏（栗田書店社長）、坂西志保氏（評論家）、上代たの氏（日本女子大学学長）、渋沢敬三氏（実業家）、原安三郎氏（日本化薬社長）の8名が提唱者となり、「小さな親切」運動が発足しました。

以来、50年以上にわたって、“できる親切は、みんなでしょう。それが社会の習慣となるように。”をスローガンに運動を推進、「小さな親切」運動は、日本中に広がりました。道府県に本部、市町村に支部が結成され、ますます運動は充実し、運動参加者総数は284万人を超えるまでになりました。

21世紀になって、日本はもとより世界中が大きく変化しています。このような時代だからこそ、私たちは「小さな親切」運動を通して、思いやりあふれる、心のかよう社会づくりを目指したいと考えています。

## 「小さな親切」八か条

- 1 朝夕のあいさつをかならずしましょう。
- 2 はっきりした声で返事をしましょう。
- 3 他人からの親切を心から受け入れ、「ありがとう」といしましょう。
- 4 人から「ありがとう」といわれたら、「どういたしまして」といしましょう。
- 5 紙くずなどをやたらにすてないようにしましょう。
- 6 電車やバスの中で、お年寄りや赤ちゃんをだいたお母さんには、席をゆずりましょう。
- 7 人が困っているのを見たら、手つだってあげましょう。
- 8 他人のめいわくになることは、やめましょう。

【この八か条は、日常生活の基本です。】

# 「小さな親切」作文発表者名簿

日 時 令和3年10月5日(火)

## 【発表者】

氏 名	学 校	学 年	題 名	入 賞
しのぎき まみ 篠崎 まみ	栃木市立 寺尾小学校	2	小さなひと言	小学生低学年 〔最優秀賞〕
けづか なつき 毛塚 渚月	栃木市立 赤麻小学校	6	手紙の力	小学生高学年 〔最優秀賞〕
とうじょう あんな 東條 杏那	栃木市立 栃木第五小学校	6	私が見つけた宝物	小学生高学年 〔優秀賞〕
なかの としなお 中野 利尚	栃木市立 藤岡第一中学校	2	思いやり(親切)の伝 染	中学生 〔最優秀賞〕
やまもと ゆうか 山本 優香	栃木市立 寺尾中学校	3	祖父が遺してくれた もの	中学生 〔優秀賞〕

## 小さなひと言

栃木市立寺尾小学校 二年 篠崎まみ

わたしは、一年生の時からフットベースのチームに入っています。お姉ちゃんがやっていたのでわたしも入ることにしました。一年生は六人いて、土曜日も日曜日もれんしゅうしています。長くてつらいですが、楽しいときもたくさんあります。

わたしはみんなより早く入っていたので、キャッチボールが上手です。だからキャッチボールのれんしゅうで、お友だちがミスをするとなんだかモヤモヤしました。

「なんでわたしのボールがとれないの。」

と、お友だちをせめることがありました。ある大会のとき、かんとくに「わたしをし合に出してほしい。」と言ったこともありました。するとかんとくは、

「まみちゃんもがんばっているけどみんなもがんばっているんだよ。チームでがんばっているんだから友だちがかっこよくできたときは『ナイスプレー！』『ミスしたら』『ドンマイ。』『自分がミスしたら』『ごめんなさい。』と言ってほしい。友だちを気にかけてね。」

と、思っていたこととちがう言ばがかえってきました。その方がし合やれんしゅうが楽しくなると。でもわたしは同じ学年で一ばんできるのになんてお友だちに『ナイスプレー！』。なんて言わないといけないだろう。わたしは言いたくなんかないな、と思いました。

一年生の秋、はじめてし合に出たときのことです。わたしはきんちょうしてぜんぜんボールがとれませんでした。ミスばかりでなきそうになりました。そんなとき同じ学年の子たちが、

「ドンマイ、ドンマイ。」  
と大きな声で言ってくれました。するとなんだかきゅうに力がわいてきたのです。『ドンマイ』のたったひと言が、こんなにもうれしいことなんだ、と感じたことは、今でもわすれられません。

二年生の春、同じ学年のかなちゃんせん手にえらばれました。一年生のときからいっしょにっらいれんしゅうをしてきたかなちゃんが、ホームベースをふんで一点をとったときは思わずハイタッチしました。自分のことのようにうれしくて、ジャンプをしてみようくらいでした。『ナイスプレー!』の言ばも大きな声で言えました。なんだか二ばいもうれしくなりました。そしてかなちゃんがアウトになったときは『ドンマイ。』と声をかけました。かなちゃんはにこっとわらってくれました。わたしの心がかんちゃんにつたわって、心がかかるなくなったのを感じました。こんな小さなひと言が、お友だちをたすける言ばになるんだと、大切なことに気づくことができました。

それからのわたしは、学校にいるときも友だちに『ナイス』『ドンマイ』のような言ばを、心にかかるくする言ばをかけるようにしています。自分もお友だちも毎日楽しくすごすことができますように、という気もちをこめてえがおといっしょに『ナイス!』



## 手紙の力

栃木市立赤麻小学校 六年 毛塚渚月

クラスに、一つだけ空いた席があります。その席の子は、昨年から体調をくずして、欠席が増えました。

ある日、先生が私に

「手紙を書いたら、渡してあげるよ。」  
と、おっしゃいました。私は、手紙を書けるうれしい気持ちと同時に、果たして私が手紙を送っても喜んでくれるだろうかという不安な気持ちになりました。

しかし、その不安は一瞬で消えました。手紙を書きたいという素直な気持ちが、不安を打ち消したのです。

早速、学校での出来事や趣味の話、イラストを描いて、先生に渡しました。すると、数日後、友達が私の手紙を喜んでいたことを知らされました。私は、うれしくなり、また手紙を書きました。こうして、私からの一方的な手紙のメッセージが続きました。

そんなある日、先生を通じて友達から返事が届いたので。手紙には、病気が良くなってきていること、私の手紙を読むと元気になることなどが書かれていました。私は、胸が熱くなりました。手紙をもらって、こんな気持ちになったのは初めてです。私の手紙で元気になるのなら、何通でも書こうと思います。実際にその後も手紙を書き続けました。たまに届く友達からの返事に、わくわくしたり、ドキドキしたりと、私は、自分自身も友達からの手紙で元気をもらっていることに気づきました。

それからしばらくたったある日、教室に友達が久しぶりに姿を見せてくれました。数

か月ぶりに会う友達の周りに、私達みんなで駆け寄りました。その時、その友達が「なっちゃんのおかげで元気になってるよ。なっちゃんの手紙を読むと元気になるよ。」と、私に言ってくれたのです。友達は、私の手紙を大切に箱に入れて保管し、何度も読み返していると話してくれました。私は、その言葉に心を打たれ、涙が出そうになりました。だれかの役に立てるなんて思っていなかった私でも、少しは役に立てたのです。

私は「手紙の力」を実感しました。この友情は、手紙がつないでくれたのだと思います。手紙は電話などちがいがい、時を選ばず、相手をそくばくしません。また、メールとちがって、書いた人の文字や絵、紙の手触りや音が合わさり、世界でたった一通の手紙となり、温かい心も運んでくれます。手紙は、心の距離を縮めてくれると大きく実感できました。

友達は、少しずつ登校できる日が増えています。まだ、みんなと一緒に教室で授業を受けることができません。空いた席を見ると悲しい気持ちになります。急がずゆっくり治してほしいです。みんな言葉には出しませんが、友達のことを心の中で大切に思っています。二十八人全員そろって、授業を受けることができる日を、私達はいつまでも待っています。



## 私が見つけた宝物

栃木市立栃木第五小学校 六年 東條杏那

私は中国武術カンフーを習っています。ジャッキー・チェンさんの様々な映画を見て、「私もやってみたい。」そう思い、習いはじめました。私にはこれといった特技がなかったので、大好きなジャッキー・チェンさんが映画でやっていただいていたカンフーを、一つの特技にしたかったからです。でも私はカンフーが好きではありませんでした。けれど、中国と交流のある親戚のおじさんが、たまたま中国に行くことになり、中国の文化が好きな母もおじさんと一緒に行くことになったので、私も旅行気分について行きました。それから私のカンフーに対する思いが大きく変化しました。

二〇一九年四月三日、私は中国へと旅立ちました。上海の空港でチェックインする時に、私は中国語が分からず、そして何より日本とは全く違った景色を見て、「中国なんか来なきゃよかった。楽しみにしていた私がばかだった。」と思い、半分泣いてしまいそうになりました。ですが、おじさんの知人であるシヨウさんという中国人の方のお陰で、だんだんと中国にいる楽しさを見つけることができました。一日目の夜、私は好きではないカンフーを十人程の中国人の方々の前で表演することになったのです。私は「この時間が早く過ぎてほしい。」表演している時に何度も思っていました。そのため、満足した表演ができませんでした。私は、はずかしがり屋で何人もの人に自分の表演を見られるのが、はずかしくてたまらなかったのです。でも私の表演が終わった後に、思いもよらない大きなたくさんのお拍手と「素晴らしい、格好いいね。」などのたくさんうれしい言葉をいただきました。私は、覚えててできこちないけれど、「謝謝」と感謝の気

持ちを伝えました。そうしたら中国の方から「こちらこそ見せてくれてありがとう。見て楽しかったよ、これからも頑張ってるね。」と予想もしていなかったうれしい言葉が返ってきました。その時私は、「言葉が通じなくても一つの文化であるカンフーの私の表演で、誰かを楽しませることができるといいな。」と気付かされました。

私は中国から帰国してきた後、ジャッキー・チェンさんの「ベスト・キッド」という映画を見ました。「人生のすべてにカンフーがある、人との接し方にも。」という言葉が私は大好きです。なぜなら、その言葉で私はいつも頑張っている気がするからです。そしてカンフーは戦うためのものでなく、誰かを守るためだと教えてくれるような言葉だからです。

私は中国に行つてとても勉強になりました。コロナが終息し、海外に行けるようになったらもう一度中国に行き、今度は自分史上最高の表演をしたいです。今ではカンフーが私にとって、どれほど大切なものかが分かるようになりました。これから色々な方に感謝をし、自信を持って表演できるようにしたいです。そして、私の一つの強みであるカンフーを、もっともっと上達させていきたいです。



## 思いやり（親切）の伝染

栃木市立藤岡第一中学校 二年 中野利尚

「親切とは何ですか？」と聞かれたら、僕はきつと「思いやりの心」と答えるでしょう。それは、母から聞かされた、僕の曾祖母の話を思い出すからです。

曾祖母は苦勞の多い人でしたが、いつも笑顔で、困っている人を放っておけない人でした。曾祖母が八十歳くらいの頃、近所に七十歳くらいのおばあさんが住んでいました。

「息子さんが家を出て、一人暮らして大変だろうな……寂しいだろうな……。」と、曾祖母は毎日のようにご飯を作っては届け、話し相手になっていたそうです。

「どうしてそんなに親切ができるの？ おばあちゃんの方がずっと年上なのに。大変でしょう。」

母が尋ねると、曾祖母は笑って答えました。

「大変なんかじゃないよ。親切をしているつもりもない。相手を思えば、自然と言葉をかけたくなるし体も動く。それだけだよ。」

このような曾祖母のエピソードは、数え切れないほどたくさんあります。そして、母はいつもどこか誇らしげに話してくれます。

曾祖母が大好きで、曾祖母の生き方に憧れている母ですが、僕から見た母も「どうしてそんな親切ができるの？」と聞きたくなるくらい人を思いやれる人です。

先日、同じ部活動の友達が、自転車を押して歩いて帰っていました。しかも、学区外から通う友達で、家まで歩くとなると一時間以上かかっています。声をかけると、タイヤがパンクしてしまったとのことでした。僕は彼を自宅に連れ帰り、母に相談しま

した。母はすぐに職場に連絡し、自転車を積める車を借り、僕と一緒に彼を自宅まで送ってくれました。別れ際の、「ありがとう」の言葉に母は笑顔で答えていました。

でも、僕は、母の体調がすごく良くないことに気づいていました。それなのに、彼に笑顔で接し、車まで借りて送り届けてくれたのです。申し訳なく思った僕は、母と二人になった車内で、「具合悪いのにごめんね。」と伝えました。すると、母は笑顔で言いました。

「謝るなんておかしいよ。利尚が、あの子に気づいたのに声をかけずに帰ってきたとしたら、お母さんはとても悲しかったよ。ちゃんと送り届けられて良かったね。」

母のこの言葉に、僕も彼の力になれたのだ、母も嬉しく思ってくれたのだと胸がいっぱいになりました。

思いやりあふれる曾祖母に憧れる思いやりある母。この一件を通して、僕自身にもその血がちゃんと流れていることを感じました。

以前、どこかで「思いやりは伝染する」と聞いたことがあります。思いやりから生まれた親切な行為は、周囲にどんどん広がっていくということでしょう。曾祖母から母が、母から僕が受け取った思いやりを、僕もどんどん広めていきたいです。そうすることで少しずつ、もっと優しい社会を、もっとすばらしい未来を作っていけると信じています。



## 祖父が遺してくれたもの

栃木市立寺尾中学校 三年 山本優香

今年の四月、祖父が亡くなった。母方の祖父なので同居ではなかったが、父方の祖父は私が生まれるずっと前に亡くなっている。私にとってはたった一人の祖父だった。運動会を見に来てくれたり、私の家族と一緒に出かけたりなど、祖父とのたくさん思い出があったので、亡くなったと聞いてからの数日間は、とても悲しかった。しかし私は、少しずつ立ち直ることができた。その背景には、私たちが祖父や祖父を取り巻く人から受けたたくさんの方の親切があったからだ。

亡くなった祖父は、昨年から体調を崩し、入院することになった。入院するまで、母が毎日祖父の様子を見に行って世話をしていたのだが、祖父はいつも母に、「ありがとう。」と言っていた。私も、母と一緒に祖父の家に行き、何度か行ったことがあるが、そのときにも私に「ありがとう。」と何度も言っていた。また、祖父は退院後家には帰らず、施設に入所することになった。施設に入っても、体調の悪い日が続いたが、祖父はどんなに具合が悪くても、世話をしてくれる介護士の方が話しかけると、必ず笑顔を見せ、「ありがとう。」と言っています。」と言っていたらしい。だから、介護士さんの方も、「本当に嬉しかった。」と言っていた。また、施設には色々な人がいて、中には強情な人もいたそうだが、祖父は誰に対しても態度を変えず、とても立派で優しい人だったと、亡くなった後、ケアマネージャーさんが母に話してくれた。私は、仲が良い人とそうでない人に、同じ態度で接することがあまりできない。だからこそ、祖父はすごいなあと、改めて思った。また、「ありがとう。」という言葉は何気ない言葉だけど、とても大切なだと改めて思うこと

